

(様式4)

学位論文の内容の要旨

氏名 吉田 久美子 印

(学位論文のタイトル)

Development and validation of the self-care agency scale for cancer patients under treatment

(治療期にあるがん患者のセルフケア能力の尺度の開発)

(学位論文の要旨)

背景: 治療期にある患者は、様々なセルフケアの実施に伴うセルフケア能力を活用し、支援することが重要である。そのため、看護師が患者のセルフケア能力を判断する用具が不可欠である。

目的: 治療期にあるがん患者のセルフケア能力を測定できる尺度を開発することである。

方法: 1.概念モデル: 研究の枠組みを構成するための1~6のステップ(バーンズ 2009)を経て作成した。2.暫定版質問票の作成: 質問項目の原案の妥当性について、Oncology Certified Nurse Specialistの5名とがん看護研究で尺度開発の経験をもつ5名の研究者の計10名で内容妥当性を検討した。因子と項目の合致性について一致率の基準を80%以上とし、該当した項目のみ採用し暫定版質問票の妥当性を確保した。3.対象者: 関東信越地区内にある4病院において外来通院中のがん患者を対象とした。4.調査内容: 調査内容は一般的背景には年齢や性別、家族構成と職業などを含めた。そして、①暫定版質問項目、②本庄(本庄 2001)が開発し、信頼性と妥当性が証明されているCronbach'α係数0.91の慢性病者のセルフケア能力を査定する質問票 Self-Care Agency Questionnaire (SCAQ)、③Cella DF (Cella DF 1993)によって開発され信頼性と妥当性が証明されている Functional Assessment of Cancer Therapy General (FACT-G) から構成した。5.分析方法: 項目分析、確証的因子分析を用いた構成概念妥当性の検討により尺度を構築し、信頼性、基準関連妥当性の検討を行った。これらは倫理規範に基づき実施した。

結果: 対象者は303名であった。項目分析として天井効果あるいはフロア効果に該当した項目と Pearson の積率相関係数により、項目間に0.70以上の強い相関を示した項目の合計52項目を削除し28項目が残った。構成概念妥当性は、探索的因子分析として項目分析後に残った28項目について探索的因子分析を行い項目数は25項目となった。採用された25項目は3因子構造に分類された。確証的因子分析では、尺度の適合度指標はGFI=0.911、AGFI=0.878、RMSEA=0.071であった。Cronbach'α係数は0.900であり3因子15項目の二次因子モデルの「がん患者用セルフケア能力尺度 (Self-care Agency scale of Cancer patients : SAC)」が構築された。下位尺度は【生きる姿勢を整える能力】【人とのつながりをもち活力を得る能力】【体調管理に取り組む能力】から形成され、各 Cronbach'α係数は0.795~0.883であり信頼性が確保された。外的基準とも有意な関連性が認められた。

考察: 本尺度の第1因子【生きる姿勢を整える能力】のCronbach'α係数は.883と3因子の中で最も高い値を示された。この背景として、がん患者が不安や希望などを含む複雑な心理を抱えながらも自己の思考を基に活動を創る特徴が示された。SACは科学的に構築された背景をもち、信頼性・妥当性が証明されたことから、看護のアセスメントツールの1つとして活用できる。セルフケア能力に関する看護研究に役立つことも考えられる。看護の躍進的な発展に寄与することが考えられる。

結論: 尺度の構成概念妥当性および基準関連妥当性、信頼性が確認され、開発した尺度は治療期にあるがん患者のセルフケア能力を適切に測定できる可能性が示唆された。